

協同的な学びを育てる保育の在り方

生駒市立あすか野幼稚園 教諭 三石 ゆか

Mitsuishi Yuka

要 旨

小学校以降の生活や学習の基盤として成り立つ幼児教育の在り方を意識し、特に5歳児後半を接続期前期と考え、その時期の子どもに対する保育の在り方を「協同的な学び」の視点から研究する。

キーワード： 協同的な学び、協同性がはぐくまれる過程

1 はじめに

今回の研究をきっかけに、幼児教育から小学校教育への滑らかな接続がなされるよう、様々な取組が大切であることを改めて確認することができた。遊びや生活の中で生じた興味・関心・願望などを起点に、実体験を通して幼児期に身に付けた「学び」が、子どもにとって児童期以降における生きる力の基盤となるものにしていきたいと考える。そのためにも、「学習」の場につながる、遊びや生活を通した「協同的な学び」の在り方を、日々の保育を丁寧に見つめ直し、指導者に必要な役割を意識しながら探っていきたい。

2 研究目的

幼児教育の中で、子どもたちが遊びや生活を通して学ぶ姿・実践を通して「協同的な学びを育てる保育の在り方」について研究する。

3 研究の視点

接続期の協同的な学びを考えると、3歳、4歳、5歳の時期に経験を積み重ねていく中での育ちを見逃すことはできない。そこで、実践事例を次のような視点から探っていく。

- (1) 3歳、4歳ではどのような経験が必要か。友達や指導者など、協同に欠かせない「人とのかかわり」を視点に探る。
- (2) 5歳ではどのような経験が必要か。具体的な子どもの姿や指導者の援助から探る。
- (3) 子どもたちの育ちに必要な指導者の役割を探る。

4 研究内容

- (1) 3歳児の実践事例を通して

ア 「かいじゅう屋さんでカメラを売ってみよう！」(10月)

入園当初、母親と離れるのを嫌がり泣いていたT児。指導者とのふれ合いや家庭の支えもあり、少しずつ園生活に慣れ、友達と一緒に遊ぶことができるようになっていった。しかし、自分の思いを出すことはなかなかできずにいた。

9月後半

運動会が近づくにつれ、これまでと生活のリズムが違ってきた不安からか、自分からしたい遊びを見つけたり、友達の中に進んで入っていったりすることができない場面が何度か見られた。

幼稚園における生活の流れがいつもと違うことに、対応しにくい様子が見られる。

10月3日

いつも一緒に遊んでいる友達は、保育室でままごとをしていた。T児は少し離れたところで立ちすくんでいる。指導者が誘いかけても悲しそうな表情で動こうとしない。T児の視線を追うと、おもちゃのかいじゅうを見つめている。そこで、そのかいじゅうをT児が使い出しやすい場に持っていった。すると、ゆっくり手に取り、遊び始めた。一人で20体ほどあるかいじゅう全部を積み木の上に並べている。

T児の姿を追いながら、遊び出すきっかけをつくる。

「何しているの?」「かいじゅう屋さん?」「かいじゅう売っているの?」と、数人の幼児が並んでいるかいじゅうに興味をもち、T児に近付いて話しかけた。T児は、「うん!かいじゅう売ってるよ。」と、尋ねられたことに合わせるように手渡し始めた。「ください。」「はい、どうぞ。」そんなやりとりが続き、すぐにかいじゅうはなくなった。指導者は、「またT児が一人ぼっちになってしまうのかな」と心配しながらも見守っていた。先にかいじゅうを買いに来ていた一人の幼児が、今度はおもちゃの使い捨てカメラを積み木の上に並べ始めた。すると、T児は、「カメラも売るねな。」と、友達の思い付きをにこやかな表情で受け止めている。

一人一人の幼児のもつ経験から生まれてくる言葉を使ってかかわり合いながら遊びが始まる。

友達と思いが通じる喜びを感じている。

子ども同士の会話の様子を見守る。

T児がどのように反応するのか見守り続けたところ、友達とのやりとりを通して自信をもって話す姿が見られた。

イ 「かいじゅう屋さんでカメラを売ってみよう!」の事例から考えられる、3歳児で経験しておきたいこと

この頃の3歳児のお店屋さんごっこは、それぞれ好きなものを並べたり手渡しを繰り返したりして、一人一人が思い付いたことをしている姿が多く見られる。遊びの中で共通のイメージをもって展開するには至っていないが、この時期に指導者との信頼関係を築き、幼稚園は楽しいところだということを感じ取ることが大切だと考える。

このために、経験しておきたいこと、また指導者の援助で大切にしたいことの例をあげる。

<経験しておきたいこと>	<指導者の援助>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 身近にある興味をもつ遊具や玩具で遊ぶ。 ○ 指導者や友達に声をかける。 ○ 友達のイメージを感じることができる。 ○ 同じ場にいる友達との遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人に寄り添う。 ・ だれとのかかわりを求めているのか子どもに寄り添うことで察知する。 ・ 遊ぶ楽しさを感じ取れるような言葉を伝えるなどしてかかわる。

このような経験を積み重ねていくことで、友達への信頼感が培われ、集団の中で安心して自分を出すことができる力が育っていくと考える。集団生活が初めての3歳児ということもあり、指導者

は手助けしなくてはと思いがちである。しかし、本当に必要なのは、幼児自ら人やものとかかわり始めることができる環境の構成や一人一人に応じた援助を行うことだと考える。

(2) 4歳児の実践事例を通して

ア 「広くなったな！」

3歳児からの進級児と4歳からの新入児が年中で同じクラスになる。そのため、4月当初は、さまざまな経験の違いから、思いが通じ合えずに起こるトラブルの場面が多く見られる。

□ …指導者の読み取り
□ …指導者の援助

6月初旬

4人の男児が集まり、積み木をつなげて電車を作って遊んでいた。そんな中、「ぼくはここに乗る。」「ここはぼくが乗りたいねん。」と、M児とY児の間で場所の取り合いが始まる。一緒にいたK児が「座るところ広くしたらいいねん。」と、アイデアを出した。このことを、指導者はM、Y児に伝えるが、自分が座りたいことを主張し合い互いに譲らない。

M児とY児は、互いに主張し合って譲らない。

そこで指導者は、牛乳パックでの積み木作りを提案する。「これで積み木作ろうか。」と牛乳パックを取り出すと、「えーっ。これで作るの?!」と不思議そうな様子である。指導者が作り始めると、M、Y児が「やってみる。」「ぼくも一緒に作る。」と積み木作りに参加してくる。そばにいたK児も手伝い始める。つなぎ合わせ積み木らしくなると、「牛乳パックで積み木できたな。」「これ、間に入れよう。」「Y君、M君できたね。」とK児。「うん、ありがとう。」とM、Y児。「乗れたなあ。」と互いにうれしそうであった。

K児の提案をきっかけに自分たちで遊びを続ける方法を見つけてほしいと考えてやりとりを見守るが、難しそうな様子である。何か遊び続けるための提案があったほうがよいのではないかと考えた。

K児のアイデアを取り入れ、知らせる。

積み木作りを通して、互いの思いを少しずつ出していくことができた。

遊んだ後、K児の提案をクラスの子どもたちに紹介する場を設けた。その場では、牛乳パックと一緒に積み木を作って遊んで楽しい経験をしたM、Y児たちの、うれしそうな笑顔が見られた。その後の遊びの中でも牛乳パックの積み木はたびたび登場することになる。

9月中旬

積み木で遊んでいると…。

K児「ここちょっと狭いな。あれ(牛乳パックの積み木)使おうか。」

Y児、M児「うん。そうしよう。」

H児「でもまだ狭いな。ここで食べられるようにしたいし…。」

M児「何かないかなあ?」

K児「この積み木こっちに持ってきたらできるかなあ?」

H児「できるできる、そうしよう。ぼくこっち運ぶわ。」

その後、「こうしようか。」「すごいのできたな。」などと、友達同士で考え合い、組み換えて工夫し遊ぶ姿が見られた。

1学期からの経験を思い出し、遊びに取り入れて自分からかわり合う姿が見られるようになってきた。

少しずつだが、自分たちで遊びをおもしろくする方法を考え合って遊ぶことができるようになってきた。

K児たちの遊ぶ様子をクラス全体の前で紹介する。

イ 「広くなったな！」の事例から考えられる、4歳児で経験しておきたいこと

4歳児6月の事例に見られるようなトラブルは、思いを主張し合うようになると様々な場面で繰

り返し起こるようになってくる。その中で、子どもたちは思いをぶつけ合い、なかなか自分の思い通りにはいかないことを経験する。指導者は、このような時に、子どもの姿をしっかり捉えた援助をしていくことが大切である。指導者が伝えすぎてしまうことで子ども自身が表現したいという意欲をなくしてしまう場面も時には起こってくる。その時の状況をどのように捉え、どのような方法で仲立ちをしたり遊びのきっかけを与えたりするかということが、この時期の子ども同士をつなぐためには重要と考える。

友達とのかかわりの中で喜びや葛藤を味わうことの積み重ねは、その後の、思いを伝え合い一緒に遊びを作り出す力へと育っていくと考える。そのために、経験しておきたいこと、また指導者の援助として大切にしておきたいことの例をあげる。

<経験しておきたいこと>	<指導者の援助>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の思いを相手に言葉で伝える。 ○ 友達と一緒に遊ぶと一人で遊ぶよりも楽しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安心して思いを出せる雰囲気をつくる。 ・一人一人の思いが表現できるような場を提供する。 ・一人一人の発見、気づき、喜びをクラス全体で共有できる場を大切にする。

(3) 年長5歳児の実践事例を通して

ア 「アオムシはぼくらにまかせて」(11月初旬)

1学期には夏野菜を、2学期になってからはブロッコリーを育てている。毎朝欠かさずに水やりをし、「どこにブロッコリーでできるのかなあ?」「前よりはっば大きくなったわ。」と、生長の様子に関心をもって見ていた。

3連休の翌日、ブロッコリーが小さく見える。不思議に思い、指導者が近付いてみると、そこにはチョウやガの幼虫がたくさんいて、そのせいでブロッコリーの見え方が変わっていたのだ。指導者は、箸を取り出し幼虫取りを始めた。あっという間に20匹、30匹になった。

そんな様子を夏や秋に虫探しに夢中になっていた子どもたちが見にやってきた。「すごいなあ。」
「チョウチョになるねんやろ。」「育てるわ。」と、虫かごを用意し始める。興味をもった子どもたちは、図鑑を持ってきたり年少組でさなぎになった幼虫を観察に行ったりしていた。「ほんまや。ガはおしりからにゅーって動くねんな。」「チョウはもぞもぞって動いてるわ。」と興味津々である。色や形の違いなど、集まった友達と次々に発見していった。その後、くまぐみニュース(遊びについてクラスで情報交換し合う時間)でみんなに知らせたいと言ってきた。

年少組のM指導者がやってきた。数日前から年少組では、ブロッコリーについていたアオムシを育て始めていたため、M先生は、年長児にさりげなくチョウとガの幼虫の見分け方を知らせてくれた。

<くまぐみニュースの時間> 5人の男児が自信たっぷりの表情でみんなの前に立つ。

<5人の男児>

色も違います。チョウは横に黄色い点々がずっとあります。

チョウはこうやってもぞもぞ動くけど、ガはおしりからにゅーって動きま

育てたいからみんな、えさを持ってきてください。キャベツとか好きです。

<クラスの友達>

Kくんたちもう虫博士やなあ。

ほんまやな!

すごいな!



次の日の朝、前日と同じく幼虫取りを始めた指導者に、「先生、もうアオムシはぼくたちにまかせて！」と話しかけ、ていねいに葉の裏まで探す子どもたちの姿があった。たくさん子どもたちがえさも持ってきた。えさをあげながら、「ほんまや。こっちとこっち、違うなあ。」と昨日の友達の発見を自分の目で確かめる姿があった。

担任ではない M 指導者が子どもたちにタイミングよく援助できたことにより、子どもたちはアオムシに興味をもち、クラスの友だちに知らせたいという意欲が高まった。さらに、クラス全体の場でも、ものおじせず自信をもって発言することができたと考える。

イ 「アオムシはぼくらにまかせて」の事例から考えられる、年長5歳児で経験しておきたいこと
この時期までに、事例で見られるように、友達と一緒に遊んだり発見したりすることが楽しいと感じ取れるように育っていることが大切だと考える。



このような場面において、経験しておきたいこと、指導者の援助で大切にしておきたいことの例をあげる。

<経験しておきたいこと>	<指導者の援助>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 友達同士で話し合い、遊びを進める。 ○ 友達同士のもつイメージや思いがつながら、認め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちの遊びや生活について、指導者間での伝え合いを常時行い、様々な活動の場でタイミングを逃さずに援助できるようにする。 ・ 一人一人のしたことや思ったことを、クラス全体で伝え合い共有できる場を意図的に設ける。

ウ 「おとなとこどものパラダイスへようこそ」(10月・11月)

年少時には、年長組のお店屋さんで繰り返し足を運び、お客さんとなってやりとりを楽しんでいた。また、年中組になってからは、一人一人の興味の在り方や季節を意識した遊びの楽しさを味わう経験を積み重ねてきた。年長になった1学期、保護者主催の「なつまつり」を経験し、夏の遊びが盛んになる中で、自分たちでも「まつり」を始めようとするが、天候などの都合から実現できずに終わっていた。子どもたちの遊びの中での発言から、自分たちも「なつまつり」のようにお客さんを招いてみたい、という気持ちをもち続けていることを指導者は感じていた。

11月2日の参観日に、お店屋さんや遊びのコーナーにお家の方にきてもらったかどうか、子どもたちに相談する。

 …指導者の読み取り
 …指導者の援助



やりたい、と子どもたちは話し合いを始めた。

話し合い 10月20日

家の人に来てもらう場に名前を付けようということになり、話し合った結果「おとなとこどものパラダイス」という名前になった。

「おとなとこどものパラダイス」でやってみたいお店屋さんやゲームのコーナーなど、子どもたちからいろいろな意見が出てくる。また、お客さんを招くために子どもたちが必要と考えたことなども出てきた。身近な生活経験と、今まで経験

一人一人のもつイメージを大切にしながら友達と話し合い、グループでやりたいことが互いにつながり合えるようにと考え、様子を見守る。

してきた遊びをつなげ、考える姿も見られた。

「どんぐりあめ屋さんしよう。」「えーっ、もういっぱい売ったやん。」「はち植えやさんは?」「どんなん?」「トマトとかピーマンとか植えて売るねん。」「すぐできへんやん。」

自然物を使った遊びの経験や栽培の経験から考えられる意見が最初に出てきた。

「おかあさん、カラオケ好きやで。」「あっ、ラウンドワンも好きやで。」

次に、家族が喜びそうなことを考えた意見が出てきた。

「いっぱいできたら分からへんようになるやん。」「そしたら、ここにこんなお店がありますって描いたら?」「地図?」「看板は?」「お金は?」「持ってきてもらおうか?」「紙で作ろう! ぼくそれするわ。」

一人一人のイメージはどんどん広がり、意見が次々と出てきた。友達の見聞き、同じようなイメージをもって共感する子ども、自分の思いはあるものの表現できずにいる子どもなど、様々であった。

子どもたちから出た意見をもとにお店屋や遊びのコーナーの数が決まった。グループ編成は、子どもたちのやりたい、という気持ちを尊重して自分のやってみみたい遊びを決めることになった。どの子どもも納得したグループになれたことが表情から分かった。

家族に楽しんでもらいたい、という目的意識はあるものの、同じグループでやりたいことのイメージを友達とつないでいくことに難しさがあつた。

子どもたちが行き詰まっているタイミングを逃さず、イメージを出しやすくする方法について、声かけしてやる必要があるのではないかと考えた。

一人一人の子どもの思いを十分につなげるために、同じグループの友達同士が集まってそのイメージを話し合いながら絵に表していく方法もあることを話した。やってみたい、という子どもたちの声に応え、十分な時間と空間を確保した。相談しながら描き上げていった絵を、「いっしょに描いた絵」「設計図」などとグループで呼びながら、子どもたちはそれから後の準備に活用していた。

共同画を描く 10月25日

(子どもたちが作ったグループで話し合いが始まる。)

おでん屋

あたたかい
飲み物屋

巨大
プラレール

カメラ屋

図書館

ボーリング

子どもたちは、共同画を描くことによって、お互いにどのようなことを考えているのか分かりやすくなることに気が付いたようだ。

共同画を描いた後の図書館グループ、巨大プラレールグループの二つのグループの様子を次に述べる。

自分がやってみたいことを同じグループの友達と一緒に描く。話し合っって描き出すグループ、描くうちにイメージがつながり、後半話が大きい盛り上がったグループなど様々であった。

準備開始 10月26日

図書館グループ

準備を進めていく中で、必要なものをたくさん思い付くようになり、好きな遊びの時間にグループで声を掛け合って準備する姿も見られた。グループのみんなイメージした図書館を『みすたーはばたき』と名付け、開館を目指すことになった。一人一人がたくさんの本、図書貸し出しカード、パソコン、お話し会の紙芝居など、必要だと思うものを次々と考え付いている。「みんなのカードがあるな。」「小さい子も来るのと違う?」「先生、大きい組みんなで何人?みんな来てくれるようにみんなの分作ることにしてん。」と友達の意見を基にアイデアが広がっていく。「明日の朝、廊下で待ち合わせな。」と、作業を進め始めた。遊びを実現していくために自分の役割を意識した言葉を自分たちで考え、次々と相談し合う姿が見られた。

グループ別に準備をする日が続いてくると、早くに準備ができるグループも出てきた。中には、別のグループの準備を手伝いに行く子どもたちもいる。受け入れる側のグループも、喜んで手伝ってもらっている。

相談しながら共同画を描いたことでグループの友達が何を作ろうとしているのか納得できたようだ。イメージしているものをどのように作ったらよいのか、ということに子どもたちの気持ちが変わっていった。

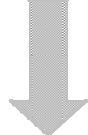
子どもたちが指導者に、自分のイメージを言葉で伝えながら、どう作ったらいいのか、と相談してくることにヒントを与えたり、それぞれに適当と思われる素材を提案したりする。

クラス全体で相談できる時間を活動の合間に設けた。グループの友達だけで解決できない相談を出し合い、クラスの友達からアイデアがもらえる場とした。

巨大プラレールグループ

「巨大プラレール」は、T児が好きな遊びの時間に電車を作ったことから始まった。後ろに車両を連結させ、細く切った段ボールで線路を作ることになっていたが、車両作りに手間取り、線路がなかなか出来上がらない。その様子に気が付き、早く準備ができたグループの子どもたちは、「ぼくたち手伝おうか。」「踏切も作るねんやろ。あの絵に描いてたもんな。どのへんにする?」と、手伝いに来た。ともに、参観日に間に合うようにと作業を進め始めた。

各グループの共同画は、クラス全体で知らせ合っていた。また、各グループの準備している内容を報告し合ったり相談し合ったりしていたため、クラスの子供たちは、準備状況を互いに把握していた。このことが、巨大プラレールのグループに対して、周りの子どもたちが自分たちから手伝い始めることができた要因と考える。



この2つのグループに見られるように、子どもたちは、自分たちで作った「パラダイス」を自分たちで催すことを楽しみにする気持ちが高まっていき、当日を迎えた。

保育参観 (おとなとこどものパラダイス) 11月2日

子どもたちは、買い物バッグと手作りのお金を用意していた。お家の方には、その買い物バッグを持っていろいろなコーナーを楽しんでもらった。

コーナーの中の子どもたちは、役割分担やどうしたらたくさんのお客さんに来てもらえるかを考

え合ったり、準備物に足りないものはないか確認し合ったりして自分たちで進めていく姿が見られた。



お乗りください。発車します！生駒駅へ行きまーす。

10本倒したらストライク！がんばってください。



ここで好きな絵本を選んでください。

どれにしますか？たまごも大根もありますけど…。



いらっしやいませ。どんなポーズにしますか？

「きょうりゅうずかん1冊」でいいですね？



写真 おとなとこどものパラダイスの様子

終了後には、たくさんの家の人が来て楽しんでくれたことを喜び合っていた。また、昼食時には、互いのコーナーの様子を知らせ合ったり、忙しかった様子をうれしそうに話したりするなど、余韻を楽しんでいた。

自分たちで、目的を達成できたという充実感と自信を、子どもたちの表情や会話から感じ取ることができた。

小さい組さんがずっと見てはったよ。

またやりたいなあ。

たくさんお客さん来たから忙しかったなあ。でもいっぱいもうかったわ。ほらこんなに！

クラスの話合いで、今度はパラダイスを準備する様子を興味津々にのぞいていた3歳、4歳児をパラダイスに招待したい、ということになった。

年少・年中児との交流 11月6日

3歳児、4歳児が手作りのお金を使えるようにしようと、一日だ

保護者に楽しんでもらえた、という自信が、もっと他の人にも楽しんでもらいたい、という次の目的をもった活動の意欲へとつながっていったと考える。

けの銀行も開くことになった。自分のコーナーを担当する合間に、銀行でお金作りの準備もできた。

当日は、3歳児にゲームのやり方をできるだけ分かりやすく説明しようと言いかたを考えたり、思いを聞き入れようと腰を低くして話したりする子どもたちの姿が見られた。

エ 「おとなとこどものパラダイスへようこそ」の事例から考えられる、5歳児で経験しておきたいこと

一人ではできないことも、クラス全体で目的をもち、友達とイメージを共有しながらアイデアを出したり考え合ったりしていくことで少しずつ実現していった。作業を進める一つ一つの段階で、時には思いのすれ違いや行き詰まることも経験した。しかし、クラスの友達からアイデアをもらったり乗り越えられると分かることや、みんなで協力したから家の人・3歳児・4歳児に楽しんでもらえたことと実感できることは、この時期に必要な経験であったと考える。

5 研究結果と考察

(1) 事例では、5歳児後半に見られる子どもたちの協同的な活動の中で、自分たちの目標を立て、友達とかかわり合いながら協力して目標を達成していく姿を見ることができた。この中で子どもたちが身に付けていった、目的に向かうために計画できること、友達と一緒に目的に向かって協力すること、目的のために自分のできることを工夫することなどが、協同的な学びで得られることということができよう。

このような協同的な学びを可能にするためには、次のような子どもたちの気持ちが高まっていることが大切だと実践を通して感じた。

ア 友達と共通の目的をもって活動することは、楽しいという気持ちが高まっている。

ちょっとした思い付きや発見・疑問などに端を発して小さな集団の中で遊びが始まる。その様子に興味をもち、思いを共有した友達が仲間に加わり、その中で、さまざまな調整をしながら活動を発展させていく。一人ではできないことに友達と一緒に挑戦したり、実現のために協力したりアイデアを出し合ったりしながら活動を進めていくようになる。その際の喜びや達成感、充実感などにより、友達と共通の目的をもって活動することは楽しい、という気持ちは高まり次の目的へと連続して取り組んでいくことができると考える。

イ 協力の必要な事柄に気付き、一緒に取り組み、やり遂げたいという気持ちが高まっている。

興味や関心を基に、友達との対話や話し合いの場を意図的に設けることで、子どもたちは思いを共有するとともに目的意識をもった活動へと動き始める。そして、達成感や満足感だけでなく、集団の中で起こる友達との葛藤や自分自身の中での葛藤など、困難な場面にも向き合いながら自主的に活動を進めていくことができるようになると思う。

(2) 3歳児、4歳児の生活や遊びの中での様々な経験の積み重ねが、「協同的な学び」の場面で大いに反映される。本研究においても、事例からとらえた3歳児、4歳児において、子どもたちが経験しておきたいことや指導者の援助について考察を行った。そこで明らかになったことは、子どもたちが指導者や友達などとかかわりながら安心して自分の思いを出せるようになることや喜びや楽しさを共有すること、ぶつかり合ったり考え合ったりする経験を通して相手を受け入れられるようになることなど、発達過程に即した人とかかわりを豊かに積み重ねていくことが大切だということである。

6 おわりに

今回の研究を通して、日々の保育を見つめ直す機会をもつことができた。「協同的な学び」を育てるために幼児期の教育で培っていかなければならないこと、また、そのために指導者が担うべき役割の一端が見えたように思われる。この幼児期の教育が児童期に行われる教育に生かされつながるものだと考えたとき、日々の保育の重要性を改めて感じずにはおられない。今後、この研究で得たことを基に、子どもたちにとって小学校への円滑な接続がなされるよう、幼稚園における保育の在り方をさらに考えていきたい。

参考文献・引用文献

国立教育政策研究所教育課程研究センター

幼児期から児童期への教育

ひかりのくに 平17